

おっと、きよし 夫の清が、家に帰って来なくなったのだ。清が四十五、カツは四十二歳だった。

こまめに貯え儉約に徹したカツだからたちまち生活に窮するということはなかったが、これから子供達にお金がかかる時なのに、と何より経済の不安がきた。峰子は短大を後半年で卒業するが、信吾と薫にはぜひ四年制の大学に行かせたいと思っていたのだ。

しかし、解決できぬというわけでもない。家の前の菜園は宅地として売ることが可能だろうし、田も三枚ある。

「裏切ったのは、あの人なんだから」カツはそうつぶやいて、困ったらあれを売ろうと心に決めた。

そんなカツに同情したのか、それとも、状況の変化に対応しただけなのか、信吾は変わった。カツとの間にはあくまで一線を引いて、決して心を開くことはしないが、荒々しい反抗は消えた。

好きだった、優しい父さんを追い出したのは母さんだ。母さんのぞんざいな態度が原因なんだ。とカツに同情しながらも夫をないがしろにし続けたカツの愚を責め、自分達を捨てた清を憎んで、少々激しかったが単純な一過性だった

反抗心は複雑になり深く心に内包され、信吾を孤独に追い込んだ。数年後、カツはそれを無言の信吾から知らされた。

て、権利書を清の目の届かない所に隠した。

これで、とりあえず人生設計を書き換える必要はない、と判断したが、それでも、カツの心は容易に立ち直れなかった。清をちつとも愛してなかつたくせに、少々のことで傷付くほど柔らかな持ち主でもないはずなのに、見捨てられたという屈辱感が予想外にカツの心に食い込んだようだ。人一倍ひと目が気になるカツなので、憐れみのこもった他人の視線に打ちのめされたのか、それとも、自分でも気付かぬところで、深く清を愛していたのかもしれない。自信とか信念といったものがぐらつき、風船が萎むように、カツの気力は萎えた。

その時のカツは、嵐は過ぎたとばかりに、炎の塊のようで手の着けられなかった信吾が、氷の塊のように落ち着いた様を喜んだ。

家の経済を見越したのだろう、信吾は一年浪人して地元の国立大学に通った。そして、嫌いなながらも肉親の情でカツの希望を無視できなかったのか、それとも、他に目ぼしい所が無かったのか、地域の未来に夢を見たのか、喋らないので何も分からないが、信吾はカツの望んだ県庁に就職した。

立派な体格をして、気難しく引き締まった顔の信吾が背広姿で出勤する姿に、カツは見惚れた。「あの人なんか居なくても」カツは折りある毎

にそうつぶやいて、一人満足感を味わっていた。しかし、信吾との生活はカツにとつて容易ではなかった。信吾は極端に無口無表情でカツを寄せ付けなかったのだ。カツが何をしても何を言っても反論するわけではない。気に入らぬことがあるとチラリと冷たい視線を投げかけて、その場から立ち去るだけだった。しかし、それがカツにはこたえた。食事の途中でも居間で薫達と団らんの時でも、つツと立ち上がり、一瞬のためらいもなく立ち去る。冷たい視線と極めてシンプルで敏速な動きは、意思の強さを表していた。それを何年もやられれば、心なんぞでどう思われても痛くも痒くもないわい、心は根無し草のような

物ですぐにどうにでも動く捕らえ所がないものなんだから。と思っているカツでも、自分を拒否する信吾の心の深さと強さは嫌でも思い知らされ、心を痛めずにはいられなかった。信吾の無言の反抗は、苦勞した母親を見捨てられず責められぬ優しさからきているのが明白なだけに、辛さは殊更だ。

結婚したいと信吾が文恵を連れて来たとき、「こんな女を！」とカツは一瞥して思ったが、渋々ながらも承諾したのは、信吾の心をこれ以上凍らせたくないからだだった。

「お父さん、私等ここで寝よう、今夜から。ここ

の襖を開け放って」嫁の文恵の声だ。

「ええー、夜はいいだろう。どうせ寝返り一つせんのだから、母さんは」信吾が答えている。

「そこで寝てくれ！ 近くに居てくれ……傍に居てくれ」さつき一人にされた時の孤独感が甦り、カツは祈るようにそう思った。

「夜中に意識が返ったらどうするん？ 声を出しても誰もおらんなら寂しいやん」

「夜中に意識が戻ることなどない。絶対に」

「絶対なんて言うたらいかん。何が起るか分かるのがこの世なんやから」二人は子供のようない言合いを始めたが、「好きにせえ」と信吾が折れた。カツはホツとして、

「ええ時もあるもんやな」と、つぶやいた。家族の誰をも構い倒す文恵の深情けを、いつもはうつとうしく思っているカツだが、今日ばかりはしみじみと嬉しかった。

(三)

二人は寝室から隣の部屋に布団を運び始めたらしい。ざわつく気配に安堵したからか、カツは疲労を感じ眠気を覚えた。あれこれ思いを巡らせ過ぎたのかもしれない。さつきまで鮮明に浮かんでいたイメージが、暗いとばりを下ろしたように何も描けなくなった。

「カツ……カツ……」混濁した意識の遠くから、自分を呼ぶ声が聞こえた。カツは心地よく沈む眠りの淵から声のする闇に目を凝らした。

「カツ！」声の主は夫の清だった。清とカツが若い頃暮らしていた清の実家の離れの前で、清はしきりとカツを呼んでいる。しかし、そこで暮らしていた頃の若い清ではなかった。カツは反射的に目を逸らそうとした。

「逃げんでええガ」清はいつもの気のいい顔でそう言った。

「何の用よ、いまさら！」懐かしさで胸に熱いものが込み上げたが、口から出てくるのはいつもの憎まれ口だ。

「会いたかったガ。気にしとつたんぞ、お前のことも子供のことも」目尻に深い皺を刻んで、老いた清は言った。

「あんなんぞに気にしてもらわんでも、ちゃんと言んじよるよ。あんなんぞ居らんようになって、清々しとるがね」カツがそう言うと、清はうんぶん分かつとる分かつとる言うように頷くと、消えた。清の横で、柿の木に繋がれているスピッツのゴンが、カン高い声で吠えながら白い尻尾をユツサユツサと機嫌よく振っていた。あれツ、ゴンは遠い昔に死んだのに、と思うと同時に、清も十年前に死んでいたことを思い出した。それでも、カツの心の中には清に会えた嬉しい

余韻が残っていた。

夢だったのだろうか、そう思いながらカツは辺りの気配を伺った。誰も居ないらしく、遠くを走る車の音が聞こえるばかりだった。もう寝たんかないな。隣の部屋で二人は寝ていると思うからか、それとも清に会えたからか、カツの心にさっきの辛い孤独感はなかった。

清が癌で入院している。余命いくばくもないと聞かされたとき、カツは会いに行きたかった。

「出て行ったあんなを、もう責めてなんぞないよ。あんなのことやから、どうせ、すぎる女を突き放せんかったんやろ。私もええ女房やなかったしな」そう言って、あの人のことや、自分を責め続

けとるやろう罪悪感を、せめて死ぬ前に消してあげたかった。三人の子供は揃って行って許してあげたようやった。行かないかん、と言いつ出したのは、信吾やつたか文恵やつたか。「母さんも行く。乗せて行ってあげるから」と信吾は何度も言ってくれたのに、私は、行けなかった。あの人の、あの気のええ顔を見たら、……あの人の憎み続けとかな、私は、いつまで続くともしれんこの空しい老後が耐えられるかいな、そう思ったのだ。

子供たちが連れて帰った清の死に顔は穏やかだった。その顔を見たらさすがに泣けて、葬式も後の法要も意地を張らずに、信吾に従って執り

おこな
行つた。

そんなことを思い出していると、バタバタとス

リツパを鳴らしながら誰かが近付いてきた。

(以上9月9日放送分)